

景観芸術

風景は 人間と自然の関係(適応関係)によって創られている

人間の自然に対する考え方 時代とともに変わる

例えば「アルピニズム」。恐ろしいと思っていた自然をより深く理解することで美しさを発見。新たな関わりあいをもつ。アルプス風景を讃える新たなビジョン。

現代 有限な地球環境の認識 自然との共生、サステイナブル、エコロジーなどの思想

里山の見直し、田園都市ビジョンへの再挑戦。都市内における自然の造成

アート(芸術活動)の役割

その時代の重大なテーマに関する問題提起

アースワークという芸術

身の回りの自然に関して忘れていたり、気がつかないでいる真実や変化をクローズアップ

大地、水辺、宇宙などと人間の関係について考えさせる風景の創出

それを見たり、体験したりすることで新たな驚き、喜び、悲しみ、生命力、感動、やる気、元気、発見、警鐘、警告、啓蒙等を与えられる。



クリスト 「ランニング・フェンス 1976」

アメリカ西海岸、ソノマ郡とマリナー郡の丘陵地帯を34.5kmに渡って走る。道路、牧草地を横切り、最後に太平洋に突入。フェンスは、高さ6m、幅23mの白ナイロン製布地を2,050枚張り合わせ、鋼製の杭に掛け渡されたケーブルに繋ぎとめる。9月上旬、2週間の間、カリフォルニア北部の起伏に富む風景を引き立てた。費用は300万ドル(約3億円)。



クリストは「単にきれいなフェンスと美しい風景だけが欲しかったのではない」「15世紀のアーティストにとって宗教が重要であったのと同じく、今日では、経済・社会問題、政治こそが重要事である。それは壮大なドラマであり、この領域の知識こそ、作品の重要な部分を構成するべきなのだ」

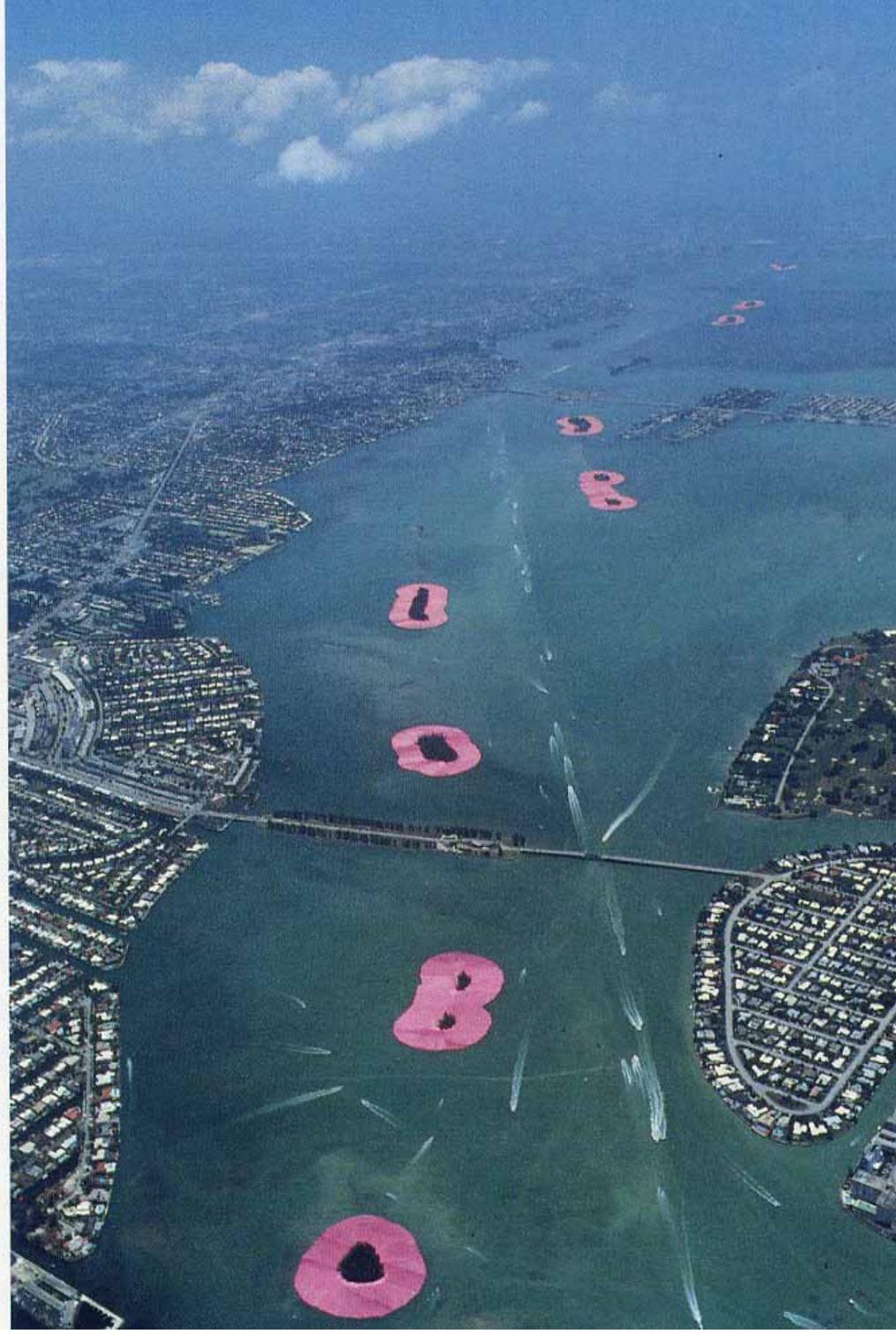
「ランニング・フェンス」の実施には42ヶ月(3年半)を要し、費用は300万ドル(約3億円)が必要だった。これはクリスト自身がドロ잉やコラージュを売って個人的に調達。

52を越える牧場を横断するための許可申請、カリフォルニア州上級裁判所の3つの課が、このプログラムに関与し、環境への影響に関する書類450ページが書き込まれた。これらは、全て風景に及ぼす人間の干渉を可視的な形態に還元するために必要な文化的構造と言える。少なくともこの点を明らかにすることが、形態的構成と同じくらいクリストにとっては、重要であった。こうした入念な準備にもかかわらず、様々な物議のうちに幕を閉じた。多くの熱狂的な支持者を得た一方、何ら明確な目的が無かったと批判する人もいた。

風景を統制する経済的、社会的、そして政治的構造と向かい合うことによって、人間が獲得する新たな価値への挑戦を試みた芸術。風景を構成する要素の存在の必然性。それを否定する必然性。これらの緊張が創り出す美的体験。それは、逆に強い必然性のないまま、無造作に風景を改変してしまう数多くの人工構造物の存在とその責任者である一般市民への警告でもある。

クリスト「包み込まれた島」1983年5月。

マイアミ市のビスケン湾。市の保有する14の島のうち、11の島を水上に浮かべたピンク色のポリプロピレンにより60mの幅で取り囲むプロジェクト。クリストはビスケン湾保全資金のために、デイド郡に10万ドル、マイアミ市に5万ドル寄付。さらにイベント2週間前には実行部隊が現地に入り込み、作品の効果を考え、島の周辺に散在していたゴミの山を一掃してしまった。また、取り囲む対象の島は、湾内に航路を確保するため浚渫の結果造られた人工の島のみに関り、自然の島には一切手を着けないことにした。そこに棲息する海牛(海牛目の海獣)や海鳥に及ぼされる悪影響を云々する批判的な団体の圧力に備え、環境影響調査の準備も整えた。海牛を入れた水槽の上にピンクの布をかけた実験では、海牛を混乱させなかったばかりか、むしろその繁殖活動を促進した。イベントは、58.5haの布地がピンク色のスタイロフォーム製のブームにくくりつけられ島へ引かれることから始まった。ブームが海岸線から60m隔たった海上に繋ぎ留められると、そこから布が島に向かって広げられ、砂浜より奥の植物の覆う地面に打ち込まれたアンカーにフックされた。島に向かって飛んでいく一群のペリカンが布地の反射を受けて真っ赤になったのを目撃したある作業員が、「魔術を見るような一瞬であった」と回想した。



クリストの独自性。

不特定多数の人々が共有できる感動であるにもかかわらず、その費用は常に彼のドローイングやコラージュ、彫刻などの販売を通して個人的に集められる資金で賄われている。いつも、作品が呼び起こす論争は環境への実際的影響よりずっと大きく、展示が長引けば長引くほど高まる。尋常でない予算をかけたプロジェクトの華々しい目的はまさにこの論争であるとも言える。こうした物議は、クリストの企画がいつも決まって提出する膨大な量の広報に起因している。

最近もニューヨークのセントラルパークの歩道に40kmに渡って、11,000本の星条旗を建てる企画をしたが、ニューヨーク市の公園課の政策に相反する理由で却下された。公園の破損を防ぐのが理由だが、このプロジェクトが500万ドルという公園整備の5年分の予算を上回ることが新聞で同時に報道された。しかし、資金は民間から調達可能であったことや、この企画が街の人々の公園に対する意識を高めることなどを考慮し、クリストに公園の修復資金に実質的貢献をすることを条件にプロジェクト実施を検討した方がより効果的であったと思われる。

景色が突然として変わること、いわば、景観的事件とでも呼べるこれらのプロジェクトは、現代の膨大な情報の海に溺れている人々に、本来の自分を取り戻すためのきっかけをつくる意識への警鐘ともなる。警鐘となるには、相当のスケールの視覚に訴えなければならぬ現代の特徴をよく表しているとともに、環境や景観の変化には、大きな社会システム全体が関与しており、市民一人一人がもっと真剣に意識すべきこともわかってくる。

美の概念

優美 (Beauty)

崇高 (Sublime)

ピクチャレスク (Picturesque)

1757年イギリスで出版されたエドモンド・バークの「崇高と優美の概念の起源に関する哲学的考察」。

滑らかさ、柔らかさ、心地よさ、といったものは、自己増殖本能を刺激し、それゆえに美しいもの……優美……として知覚される。

一方、孤独、無限、力の暗示によって生じる脅威を含むものは、自己防衛の本能に触れ、それ故に崇高なもの……崇高……として知覚される。(E. バーク)

要するに、崇高とは、人間が自分のスケールを越えた概念や実在、計り知れない存在に対して抱く、恐れおおきものに対する感情。それによって謙虚になることから、なおさら人間自身の固有の大きさが愛おしくもあり、美しくもあると感じる。

美術史家・クリストファー・ハッセーは、バークを研究し、1927年の著作の中で崇高から7つの属性を結論づけた。

「曖昧性」生理的なもの、知的なもの両者にわたる「曖昧性」

「力性」

「欠落性」暗闇とか孤独、無音といったもの

「拡大性」垂直・水平いずれであれ、それを観察する人間の相対的スケール感を消し去ってしまうもの。

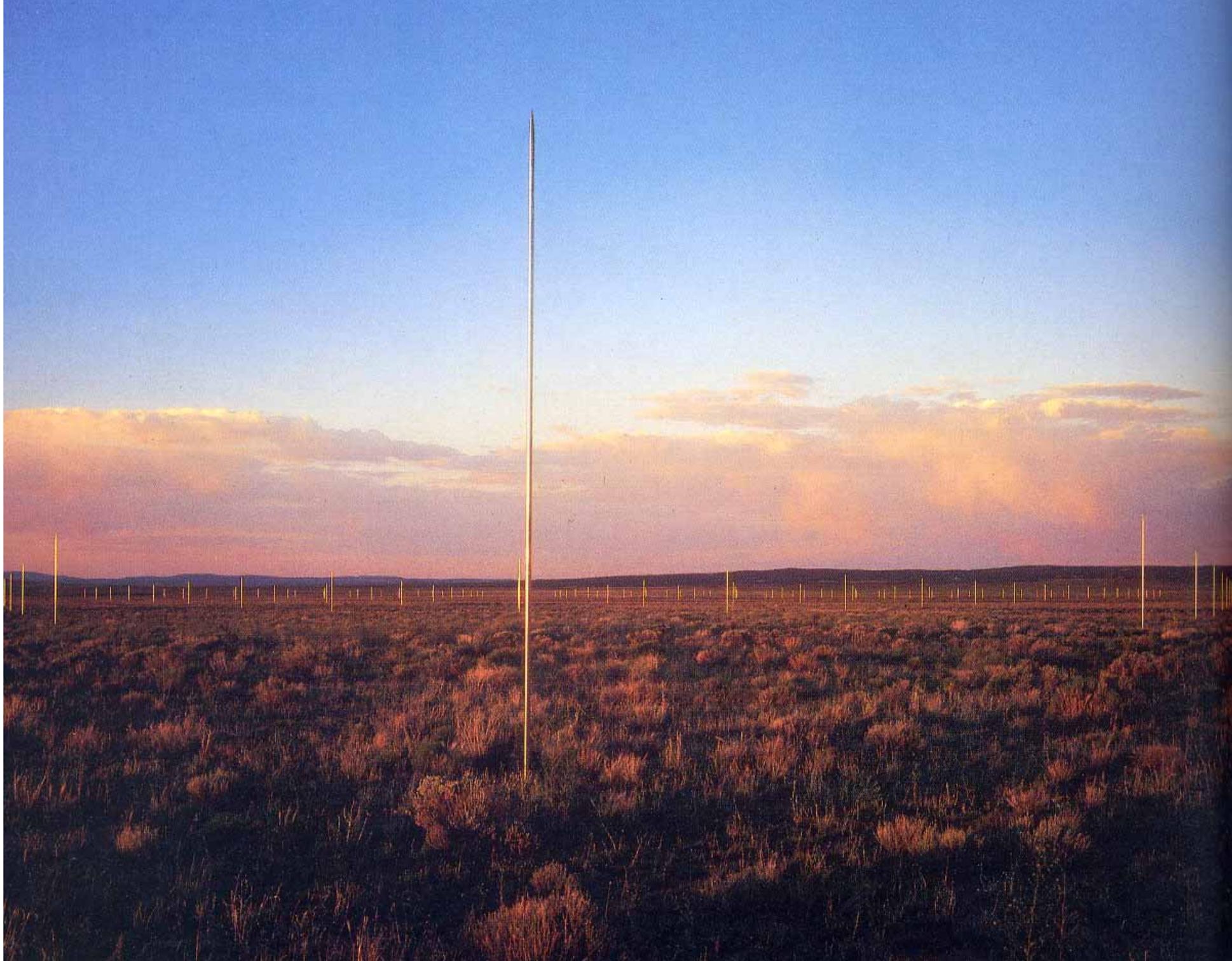
「連続性」

「画一性」あまりにも同じであること、それが飽きずに連続すること。終わり無き連鎖を暗示するもの。

「無限性」上の二つの属性から生じる文字通り無限なもの。

こうした属性を持ち、ぴったり理論に当てはまるワルター・デ・マリア「稲妻の平原」
1977年。

知性的原始主義あるいは崇高の現代的表現。



ニューメキシコ
州の西部中央
にあるクエマド
の近く。遠くに
山脈を望む半
乾燥性の盆地。
眺望を遮るもの
はなく、住人は
皆無。比較的
落雷の多い地
域。土地の力と
視覚的な壮大
さを称えるため
に、稲妻を誘発
する仕掛けを
設計。



ワルター・デ・マリア「稲妻の平原」1977年

直径5cmのステンレスポール400本。尖端が全て同一平面になるように平均して高さ約6.15mで立ち並ぶ。66m間隔(対角線上93m)のグリッドパターンで東西16列、南北25列で配置され、全体で東西1km、南北1マイル(1.6km)。

訪れる人は荒涼とした土地に佇み、全く思いがけずに大地と大空の力強い電荷の放出による交流を目撃する。しかし、実際はこれを目撃する機会に恵まれる人は少ない。むしろ、もっと繊細な魅力に魅せられる。日射しの強い白昼には作品は見え、薄明の光に映えてポール1本1本が見え始め、それが大地を分割していることがわかる。しかも、理路整然とした数値的帰結として4の二乗と5の二乗に並べられ、人間が大地分割に使うマイルとキロメートルで出来ている。人間の設定した物理的スケールの無意味さを物語るように。

ここには、「崇高」の属性はすべて見事に現れている。日中に知覚することの出来ない、しかも遠隔地にあってよくわからないという「曖昧性」がある。時には死を招く稲妻の力を感じる「力性」。孤独と静寂による「欠落感」なくしては見られない作品。土地も作品自体も広大で「拡大性」があり、どこに立っても「無限性」を感じる。ポールは確かな「連続性」を持っており、高さも間隔も「画一性」の中にある。格子状の配置パターンは無限感を観念的にもたらず。この風景の巨大なスケールと空虚感を伴うイメージは、結果的には人類の矮小さを感じさせる。

ウベデール・プライス(イギリス)「ピクチャレスク試論」1797年。

物体やランドスケープには、バークの優美と崇高のほかにもう一つ第3の属性があるとした。ものには、粗雑で荒々しく、不規則でありながらなお視覚的に魅力的なものがあり、優美と崇高だけでは、それらを正当に評価することはできない。それを「ピクチャレスク」と言い表した。文字通り絵のようであること。特に、ヤン・ファン・ホーイェン、ヤコブ・ファン・ロイスダール、サルバトール・ローザ、クロード・ロラン等の描き出す絵画のようであることを指す。おそらく、この考えは自然のもつ属性に対して人間の意識的関与があって創られる美の要素を言ったものであろう。



ロバート・スミッソン 「突堤スパイラル」1970

螺旋形態は、地勢から読みとられたものである一方、物質の構成を象徴する概念をも表現している。岩場を覆う岩塩の結晶がもつ螺旋形。「一つ一つの岩塩の立法格子が結晶内の分子ラティスの形態を通して突堤スパイラルに呼びかけている。」

ソルトレイクが地下水脈で大海に通じ、湖の中心では巨大な渦巻きが巻いているという言い伝えを、この地方を訪れたときに耳にしている。螺旋形はマクロな宇宙と同時にミクロな宇宙、神話の宇宙にも通じる鍵となる。

人間の想像力による抽象的パターンイメージの力を表現。それにより、信じる力、想像するを感じ、人間は、新たな旅を続けることができる。



『突堤スパイラル』1970、 ロバート・スミソン

黒色火山岩、石灰岩、土。 全長500m、ユタ州グレート・ソルト・レイク。

18世紀イギリスの詩人アレクサンダー・ポープの言葉「人はすべて場所の精霊に尋ねるべし」に通ずる概念。

ソルトレイクのローゼル岬と呼ばれる湖の岸边にたどり着くと、そこには工場の残骸と乗り捨てられた車が散らばり、タール堆積層から石油を抽出しようとした試みが失敗に終わったことを物語っていた。汲み尽せぬ欲望に取り付かれた人工システムの遷移が暴きだされた廃墟の光景がスミソンの創作意欲を刺激した。

